

## ～デンチャーワールド～

### ～患者の QOL 向上を目指し、素材とテクニックを駆使した義歯～

高齢化が進み、義歯の重要性は増している半面、義歯に対するイメージは良い状況と言えるでしょうか。更に、義歯に悪いイメージを抱いているのは患者さんだけとは言えません。日本の歯科技工士の9割が保険の枠で義歯を作っており、対価についても苦しい経営を強いられているように見受けられます。また、良い義歯を作るのは難しいと感じている歯科医師も増えているのではないのでしょうか。保険で良い物が作れないとは言いませんが、材料や時間の問題を考えると限界があります。最良を考え適正な材料を選び、手間をかければ、もっと様々な質の向上した義歯を製作できるはずです。義歯に対するイメージが良くないのは、良い義歯があるにも関わらず、それを術者、患者双方が知らないことが大きな要因ではないのでしょうか。

私は故河邊清治先生の歯科医院に務めていた頃から、現在に至るまで、患者さんの QOL 向上を目指したより良い義歯製作するために保険の枠にとらわれずに取り組んできました。

1本の欠損義歯から総義歯まで、私が約40年の間に行ってきた約3,000症例の中から、ほんの数例ですが、素材とテクニックを駆使した義歯を紹介しようと思います。私が提唱している修理加工のできるPMMAによる「レジックラスデンチャー」やレイヤーデンチャー(積層義歯)の中から金属床とレジン床の良いところ取りをした義歯や、審美を追及した床部のカラーリングをした「カラーレイヤーデンチャー」、痛みの改善を考えたレジン床とシリコーンを積層した「シリコーンレイヤーデンチャー」など。その他パーシャルデンチャーに必要な維持装置やフレーム設計など河邊分類法から負担域を考えた設計などを視覚的に分かりやすいように写真から、簡単な特徴とメリット・デメリットをシンプルに解説したい。

## 臨床総義歯の設計

### ～患者さんの健康美と機能を求めた総義歯～

義歯製作において臨床の場での「悩み」は、初心者のみならず、ベテランでも経験することです。特に総義歯においては無くなってしまった口腔組織の3次元の空間に痕跡を見つけ出しその情報をもとに個々に違う患者様の健康美と機能を表現していかねばなりません。大事な情報伝達である歯科医師との連携における食い違いや判断ミスなども悩みの一つです。

大切なことは歯科医師と歯科技工士の共通な物差しを持つことだと思います。生体に調和させるべく硬い模型で作業する我々の業は、気が付かないままに硬組織と粘膜を関与する軟組織の判断が薄れがちである。“臨床総義歯”を今一度理解しながら、基礎的で実践的な製法について、歯科技工士の役割分担をステップごとに生体を意識した感覚や技術をわかりやすく解説したい。